The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	〔資料紹介〕内閣文庫蔵『舞楽雑録』
Author(s)	中原, 香苗
Citation	詞林. 1995, 18, p. 56-74
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67375
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〔資料紹介〕

内閣文庫蔵『舞楽雑録』

中原　香苗

書誌

国立公文書館内閣文庫蔵『舞楽雑録』（古三三・五五三）

体裁　巻子本　一軸

題簽　「舞楽雑録　天」「舞楽雑録　地」

天地　天巻二九・七センチメートル

地巻三〇・〇センチメートル

紙数　天巻　二十三枚

地巻　十五枚

墨界、継ぎ目判あり

本書は、植木行宣氏が紹介されたもので[1]、その内容は『教訓抄』の異本かとされるように[2]、楽曲に関する故実、あるいはそれにまつわる伝承や記録などである。

現在は二巻に分かれているが、『教訓抄』と比較すると、地巻末尾と天巻冒頭とが連続しているので、本来一まとまりのものであったものが切断され、題簽を付された際に巻序が誤られたものと思われる。

成立については、紙背にみえる文書や消息類などにみえる年記のうちもっとも年代の下る正元元年（一二五九）をその上限と想定することができる。これは、『教訓抄』の成立したとみられる天福元年（一二三三）からいまだ三十年を経過していない。このことは、近世以前の写本の少ない『教訓抄』にあって、本書の価値の一端を示すものといえよう。

『雑録』の本文の価値は、『教訓抄』との成立の近さにあると思われる。本文には誤写等もまま存するが、一方で、次の引用の傍線部のように『教訓抄』では意味の通りにくい部分が、『舞楽雑録』の本文によれば意味が明確になるところも存する。

『教訓抄』巻二　3「団乱旋」

舞人光真已下十人列立タル、一人モコレヲカクサズ[3]。

『舞楽雑録』地　2「団乱旋」

舞人光真已下十人烈立タル。一人モ此ニ不覚悟[4]。

こうしたことからすると、『舞楽雑録』には『教訓抄』の善本

の面影を伝えている部分も存することがうかがえる。

また本書は、注記の方法に特色があり、次の引用で傍線を付したように、

是モ有長短之説。長説ハ〈古説、今不用之。謂云、大菩薩〉短説ハ、今世ニ用様也。

（天 1「菩薩」、〈　〉内割注、以下同じ。）

「菩薩」という楽曲の序の説について述べる箇所で、「長説」「短説」のあることをいうのに、「短説」は本文として記されるのに対し、本来一対で説かれるべき「長説」は割注の形となっている。[5]またその逆に、本来注記であったとみられる部分を、本文に取り込んでいるところもある。

舞者源家ニ留。土御門御一家。楽者被下坊家、是習伝、今有諸家〉。

（地 4「胡飲酒」）

一例をあげれば、右の引用の傍線部「土御門御一家」は、『教訓抄』では、「源家」に関する注であったのだが、これを本文中に取り入れてしまったものである。こうした傾向は、『舞楽雑録』全体にわたっている。

本書は、『教訓抄』の記事を省略・改変・整理等を行いながら抄出し再構成したものと思われるが、その中に『教訓抄』にみえない記事を含んでいる。その中には中世小説『還城楽物語』や幸若舞曲『入鹿』等との関連のうかがわれるものがあることは、興味深い。また、宮内庁書陵部に『舞楽作法』と題する楽書が存するが、[6]『教訓抄』にみえず、本書とこの楽書には共に存する記事もあり、三者の関連についても考えるべき問題があろう。

なお、本書と『教訓抄』との関係については、拙稿「内閣文庫蔵『舞楽雑録』と『教訓抄』」（『語文』六十四輯　平成七年九月）で述べた。あわせて参照いただければ幸いである。

注

(1) 日本思想大系『古代中世芸術論』（岩波書店、昭和四十八年）所収、『教訓抄』解題。

(2) 『内閣文庫百年史』（国立公文書館、昭和六十年）では、「教訓抄の一異本」と位置付けられている。

(3) 『教訓抄』の引用は、注1前掲書による。

(4) ただし、『舞楽雑録』引用文の傍線部直前の助詞には誤りがあろう。

(5) 『教訓抄』では、「長説」「短説」ともに本文として扱われている。

(6) 図書寮叢刊『伏見宮楽書集成　二』（宮内庁書陵部、平成七年三月）所収。

凡例

一、本文は、国立公文書館内閣文庫蔵『舞楽雑録』を底本として翻刻した。
一、巻序は、書誌に記したように地・天の順であったと思われるので、その順に翻刻し、便宜上、各楽曲には巻ごとに番号を付した。
一、見せ消ち・補入・抹消・傍注等は、＊1のように番号を付し、本文末尾に注としてあげた。
一、本文には声点の付されているものもあるが、翻刻の都合上、省略した。
一、旧字・異体字等はおおむね通行の字体に訂したが、「皷」等底本の字体を残したものもある。
一、片仮名の躍り字は「丶」、漢字の躍り字は「々」を用い、その他（語句の繰り返しを表す躍り字等）は「〻」を使用した。
一、濁点・句読点を私に施した。
一、紙移りは紙面の末を」をもって示し、（1紙）の如く紙数番号を記した。
一、楽譜は、できうる限り底本に近い形で翻刻し、［　］を付した。
一、虫損等による欠落箇所は一字分を□によって示し、判読不能字は（　）とした。また虫損部分等は、残った字画と『教訓抄』（日本思想大系『古代中世芸術論』所収、岩波書店、昭和四十八年）によって推定し得る場合に〔　〕によって示した。
一、割注は〈　〉を付し、割注の中にさらに割注が存する場合は、当該部分に〈　〉を付した。

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

末筆ながら、貴重な資料の調査、翻刻をお許しいただいた国立公文書館内閣文庫に心よりお礼申し上げます。

（なかはら・かなえ　本学大学院博士後期課程）

web公開に際し、翻刻は省略しました